昭和52年５月25日　第３種郵便物認可　令和２年12月10日発行（毎月１回10日発行）

円福

世界の円満
人類の福祉

THE ENPUKU

12月

2020　No.483

世界法民連帯　円福友の会

円福友の会入会のすすめ

1食1円のＳＡＢＡ運動で世界の平和に尽くしましょう。

ＳＡＢＡとは、禅寺の僧堂でお食事の前に、七粒ほどのご飯をお膳のすみに取っておき、後で小鳥に施す「生飯(さば)」というお作法のことです。

これを日本の皆さんの１食１円のＳＡＢＡとして、アジアの貧しい国々の子ども達のために学校建築（教育）や、井戸やトイレの設置（環境衛生向上）を支援する、国際ボランティア資金の運動です。１食１円ならどなたにもできます。塵も積もれば山となるように、皆さんの御協力をお願いする大きな愛の運動です。(この運動は、特定の政党や宗教や思想に関係のない、非営利の国民運動です。)

綴じ込みの郵便振替用紙を使い年会費やＳＡＢＡ運動等の協力金をお送りください。お送りいただいた皆様には毎月『圓福』と『おもいやり』をお送りし、円福友の会の活動と円福寺愛育園の子どもたちの様子をご報告いたします。

表紙の写真

キムさんがエコ村に入って井戸が二つできました。
水が出てうれしそうです。
送金できるようになって、少しずつ前にすすむでしょう。
これまでエコ村の井戸を支援していただいた皆さま、もうしばらくお待ちください。

12月号の内容

にこにこ法話　がまんする　1 p
第32回仏教講座・誌上講演会　運命を受容して生きる　4 p
途上国開発協力こぼれ話　⑥知足の余談と山頭火の話　8 p
教育随想　本音を引き出すことそして実験　11 p
修証義　二つには愛語　15 p

ニコニコ法話

がまんする

南長野仏教会の誌上講演会で、松本大学学長の菅谷昭先生と対談することができました。それは、とっても楽しい時間になりました。

大きく二つに分けてお話を伺いました。

一つは、先生の生き方の底流にあるものについて、です。

もう一つは、新型コロナウイルスについてでした。

その二番目のお話の中で、次のように述べられました。

僕は、福島の原発事故の時に、日本人はつらい経験をするかもしれないが、改めて生活を考え直すいい機会と思ったけれど、すぐ忘れてしまっているし、今回のコロナの騒ぎは、ワクチンのことを言っているけど、本当は自分が悪いんだよと反省すべきだと思ったのです。日本だけでなく世界が反省すればいいと思います。

どんな反省をすべきなのでしょうか。それは、その前段のお話の中にあり、コロナのお話の基調となっています。

コロナは野生の動物の中に静かにいたもので、人間が開発なんかで環境汚染とか乱獲で自然の中に入っていき、産業や経済で森を壊してそういうところから出てきたわけですから、やはり必要なのは思いやりですかね。他人に対する思いやりとか、自然に対する思いやりとかあるいは地球全体を考えるように生活を改めて、環境汚染を含めて温暖化もそうですけど、そういうことを考えるとってもいい機会ではないかと

思います。

私は「つらい経験」という言葉の内容を考えました。

原発問題はエネルギー問題です。私たちは、たくさんの電気を使って便利で豊かな生活を享受しています。夏にはエアコンをつけます。温暖化で、エアコンは欠かせません。調理も電気の時代になりました。部屋は明るく過ごしやすいです。交通インフラが整備されて短時間で快適に都市間を行き来することができます。飛行機は地球全体を飛び交い、誰もが海外旅行を楽しむことができます。

「つらい経験」とは、拡大し膨張し続けるエネルギー需要を、立ち止まろう。考え直そう。地球全体に思いやりをもって、不便な不自由な生活も受け入れようという提案なのだろうかと思いました。

今、コロナの影響で、飲食関係、イベント関係、旅行関係はもちろんすべての業種に不況が訪れています。前年同月比で90％以上の減収の会社もあります。しかし、私たちは旅行や会食は控えなければなりません。たくさんの行事が中止に追い込まれ、県をまたいだ旅行も自粛です。コロナの前のように過ごすわけにはいきません。

それらは「つらい経験」ですが、菅谷先生が言われるように、改めて人間は弱いことを自覚し、もっと謙虚になるいい機会にしなければならないと思いました。おもいやりの心をすべてにいきわたらせて。

菅谷昭先生をご存じない方もおられるかと思いますので、プロフィールをご紹介します。

ニコニコ法話

菅谷 昭（すげのやあきら）プロフィール

一九四三（昭和十八）年長野県千曲市生まれ。信州大学医学部卒。医学博士（甲状腺専門）。

一九九一（平成三）年より、チェルノブイリ原発事故被災地の医療支援活動に参加し、現地を七回訪問。

一九九五年末に信州大学医学部第二外科助教授を退官。翌年一月からボランティアでチェルノブイリ原発事故被災地のベラルーシに単身滞在。五年半にわたり、首都ミンスクにある国立甲状腺ガンセンターとゴメリ市の州立ガンセンターで甲状腺ガンにかかった子どもたちの治療にあたった。この活動の様子はＮＨＫのプロジェクトＸでも取り上げられ話題になった。

二〇〇〇年フランシスコ・スカリナー勲章受賞（ベラルーシ共和国国家最高勲章）。帰国後、吉川英治文化賞受賞、長野県衛生部長に就任し、二〇〇四年から松本市長。四期十六年に渡り「三ガク都（岳都・楽都・学都）」松本の発展に尽くし任期満了により退任。

二〇二〇年十月松本大学の学長に就任。

著書に「真っ当な生き方のススメ」「チェルノブイリいのちの記録」「ぼくとチェルノブイリのこどもたちの５年間」「チェルノブイリ診療記」「子どもたちを放射能から守るために」など多数。

第32回仏教講座・誌上講演会

運命を受容して生きる

聞き手・
南長野仏教会々長
円福寺
藤本光世

前松本市長
松本大学学長
菅谷 昭先生

運命を受容して生きる

藤本―先生が、信州大学医学部の研究者の道を捨てられて、チェルノブイリの原発事故で被災された人たちの支援活動に入られ、そのあと県の衛生部長になられ、松本市長を四期一六年もお務めになられたという生き方の底流にあるものについてお話しいただけませんでしょうか。

菅谷先生―それは母の易にあるのですよ。五八歳で亡くなった母の臨終の時、叔母から「あなたのお母さんが易を見てもらって、昭が四三歳で死ぬと言われた、と言ってずいぶん心配していたんだよ。だからあなたは気を付けたほうがいいよ。」と言われて、その時僕は西洋医学を学んでいましたから、「易なんて」と一笑に付していたわけですよ。ところが、四〇近くになってくると「もしあの占いが当たったらどうしようか」という気持ちが出てくるのですね。四十三の時にアメリカで学会があ

りました。その帰りの飛行機の中で「まてよこの飛行機が落ちたら確実に死ぬよな」と思ったんです。この時初めて本当に死に向き合ったんです。死に直面して、自分が大学を卒業する時に「優れた医者になるより、患者さんからこの医者に診てもらって良かった」と言われるような医者になりたかったことを思い出したんです。改めて、自分は本当に患者さんにそう思われようとやってきただろうかと自問した時に「ＮＯ！」が出ちゃったんです。すべてはここからです。

一生懸命やってきたつもりだったけど、よくよく考えてみると、研究とかそっちのほうに目がいっちゃってて、患者さんは若い人に診てもらって、口で言っても自分で診ていないから、これはいけないということで、成田に着いた時に、自分はこれは生き方を変えなければいけないと思ったんです。

そこで、僕は何をしようかと考えたときに、これまで日本の恵まれた社会の中で医療者として育ててもらったわけだから、そのお返しをするくらいの気持ちがないと死ねないなと思ったんです。死ぬわけですからね。だったら納得して死にたいなと思ったんです。仏教語で生老病死ってありますね。死を生きることはよく生きることと言いますよね。僕はよく生き、よく老い、よく病み、よく死ぬ、納得して死にたい。だからこれでは死ねないと思ったんですよ。自分は今、死に向かって生きているんだから、せめて一つぐらい良いことをして死にたいなと思いました。そのために、何をするかというときに、これまで育ててもらって、自分が得意とする分野で、少しでもお役に立つことが出来れば、と思いました。それを探している時に偶然チェルノブイリの原発事故に巡り合ったんです。

チェルノブイリでは子どもたちに甲状腺がんが増えているということで、最初に支援に入った方々、神宮寺の和尚さんの高橋さんたちが甲状腺の専門の人がどっかにいないだろ

うかとテレビで言ってたものですから、すぐに電話を入れて「僕で役に立つならお仲間に入れてください」と言ったんです。向こうは探していたので、ぜひお願いということで、そこからスタートしたんです。だから僕はチェルノブイリで活動して、「もういつ死んでもいいよ」とプロジェクトXのテレビの中で言ったんですね。すると全国から若いのに何でいつ死んでもいいよなんて言うんだとお叱りを受けました。死なんてそんな簡単なものではないよと。

でも僕は母の四十三があるのですから。僕は昭和一八年生まれですけど、ベラルーシでは西暦を使うでしょう。一九四三年生まれなんです。そこに四三を足したんです。なんでかというと死ぬから。すると一九八六なんです。実は一九八六年はチェルノブイリの事故が起きた年なんです。それで僕は母がチェルノブイリに連れてきたんだと思ったんです。僕は、それは人間の科学ではないけれど、そういう中で生かされているのかなあと思ったんです。

そこから僕は、これからは運命に逆らわないように、と思いがしてきました。だからあとは淡々と生きているんです。それまでは僕は能動的というか、自分で考えを持って行動してきましたけど。

それ以降、日本に帰ってきて長野県庁に田中知事に呼ばれて、これも向こうから来てくれないかと言われて、僕は田中さんの為ではなくて、長野県民にとって自分の持っているものを生かせるならばとお受けして、そのあと市長選だって、兄弟中に反対され、お断りしても色々な人がとっかえひっかえ来るわけです。その時にはっと思ったのが、僕は

子どもたちに「人の役に立つ人間になってね。人の上に立つ人間になる前に人を支える人間になってください」と言っておいて、自分がそういう立場になったときにNOというのは本当に良いのかなあと思っちゃったんですね。だから、僕で良かったらお受けする、たぶん僕はならないですよ、出れば良いのですよね、落ちるけど、と言ったんです。でも状況が変わってきて当選しちゃったんです。当選した日に記者会見して、その最後にホワイトボードに紙を貼って胃の絵を描いて、ここに実は癌があるんだ、これから入院するんだと話したんです。

みなさんに、本当にお前の人生はなんか不思議だなあと言われますけど、あとはもう自分自身をほとけさまに任せているような感じだなあ。だから、僕は強いですよ。いつ死んでもいいと思っているもの。市長になっても、皆さんいろいろ言われるじゃないですか。でも、ぜんぜんこたえないんです。僕はもうやることをチェルノブイリでやってきたもの。あとはいつ死んでもいいんだし、僕がやっていることは悪いことではなくて、良いと思って考えていることであって、悪いことはしてない。僕はお任せしているという生き方ですね。

藤本 ― 圓福寺の庫裡の玄関の襖に私の父が書き遺してくれた道元禅師さまが著された正法眼蔵の「生死（しょうじ）」がはってあるんです。その言葉の中に「ほとけのいへ（家）になげいれる」という言葉があるんです。それが生死を離れること。それはほとけさまにお任せすることと思うのです。「ただわがみをもこころをもはなちわすれほとけのいへになげいれてほとけのかたよりおこなわれる」それが生死を離れることと書いてあるんです。先生の生き方はまさにそれですね。

萱谷先生 ― 私としては、すべては母の易から始まったわけですが、運命を受容するということですかねえ。逆らわずに淡々と生きてきたというのがあります。

（次号に続く）

途上国開発協力こぼれ話
⑥知足の余談と山頭火の話

円福友の会顧問　吉田恒昭

前回はタイ北部のチェンマイのお寺に投宿した時の話でした。そこで私は当時のタイ農民とお寺との絆と「知足」に生きる人たちを見ました。この知足の話題と同じような話を私は学生時代にＮＨＫラジオ放送から聞いた覚えがあります。それは今の国際協力事業団（ＪＩＣＡ）が、当時は海外技術協力事業団（ＯＴＣＡ）と呼ばれていた時代の１９６０年代の話です。カンボジアに農業の技術指導で派遣された稲作専門家がＮＨＫのインタビューに答えた実話です。彼は一所懸命に日本の先進的農法を農民達の田んぼに出向いて実技指導をしたそうです。その成果は収穫期に見事に現れて、収穫量はこれまでの二倍近くに達したそうです。農民は異口同音に満面の笑顔で専門家に心からの感謝を述べたそうです。ところが、その稲作専門家が数年後にその村を訪ねてみると、農民たちはなんと作付面積を減らして田んぼで過ごす時間を減らし、余暇をお寺で坊さんと一緒にのんびりと過ごしていたそうです。当時学生であった私はこの話に驚いてしまったことを覚えています。何しろ１９６０年代の日本は所得倍増計画の真っただ中で国民が総力上げて欲望の肥大化に邁進している時代だったからです。このカンボジア農村での実話とチェンマイのお寺で見た農民が本堂の床に寝そべる姿が二重になり、知足の生き方に驚き、そして頷き、私のその後の生き方にも少なからず影響を与えたように思えます。

ここからは余談になります。私が社会人になってから、自由律俳人の種田山頭火（明治25年～昭和15年）の句に魅力を感じ始めたのはこの青春の旅を通して、農民のお寺での知足の姿を見た体験があったからだと思ってい

ます。山頭火の句の魅力は何と言っても天（仏様）・地（自然）・人（情念）が共鳴しており、句が情景と共に読み手の心に浸み込んでくる感覚です。山頭火は晩年の昭和九年から逝去の一年前の昭和一四年にかけて、長野県下に在住している自由律俳句誌「層雲」の同人の宿を転々としながら信濃路を三度も吟行しています。彼はことのほか長野の自然と人に魅了されていたのです。また長野の人達も山頭火を大好きで、それを示すのが長野県下に立

「うしろ姿のしぐれてゆくか」山頭火
（WEB より）

てられた山頭火の句碑の多さです。御代田町で詠んだ「八重桜うつくしく南無観世音菩薩像」、「歩けばかっこういそげばかっこう」などは天地人が共鳴し、命を慈しんでいます。佐久の岩村田の句碑には「風薫る信濃の国の水のよろしさ」、信濃町では「つかれもなやみもあつい湯にずんぶり」とあります。私は温泉で詠んだもう一句の「ねたいだけねたからだゆにのばす」が大好きで、温泉の湯舟に浸かる度に必ず口ずさみます。私の温泉好きは山頭火の影響が大きいようです。湧き出る清水と熱い温泉こそは長野の最良の天の恵みに他なりません。山頭火はこの恵みを雲水の極致で詠んだのだと

信濃町小丸山の句碑（WEB より）

思います。長野に住んでいる人が羨ましい限りです。かくも豊かな森羅万象天地人を詠んだ山頭火の句を朝な夕なに五感で満喫しながら生活できるのですから。

私の畏友で円福友の会カンボジアツアーで毎回大活躍し、一昨年のキムさん一家の日本訪問の際にも尽力してくれた福鹿実さん（治美夫人は東京から長野までキムさん一家を同行案内）は私が憧れる「詩の国」と「巡礼お接待の国」である四国愛媛の宇和島出身です。彼が松山に単身赴任の際に私たち夫婦は丁重に招かれて、道後温泉と松山城北の御幸寺の境内にある山頭火終焉の地である一草庵を訪ねる機会がありました。山頭火は放浪行乞十数年の漂泊の末に死期を自ら感じ、四国松山の友人知人に支えられて一草庵に辿り着きます。山頭火は「松山の風来居（一草庵）は山口（故郷の其中庵）のそれよりも美しくて、そして暖かである」と記します。そして一年後に仲間が句会を催す夜に自ら望んでいたコロリ往生を遂げます。仲間達はこぞって山頭火らしい最後だと頷いたそうです。遺体は荼毘に付され故郷の山口県防府に帰還します。私たち夫婦は山頭火が亡くなった一草庵の六畳間を間近に見入り偲ぶことができました。そこは真に知足だからこそ永遠の芸術を生み出せた空間だと感じました。併せて道元禅師の一言である「学に志すもの須らく貧なるべし」を思い起こしました。最近の世の中は〝もの〟を求めて何とも慌ただしく、すき間が少なく、デジタル情報に追い立てられているような日常になってしまいました。であればこそ、山頭火の残したあまたの自由律俳句がその存在意義を増してくると感じるこの頃です。

四国松山にある一草庵（WEB）

教育随想

心の教育

本音を引き出すことそして実験

生徒の本音を知りたい。それが、授業でもクラス経営でも私の願いでした。

極地研で、「子どもが問いかけに方言を使って答えたらその授業はほんもの」と教わりました。その通りだと思います。生徒がリラックスして授業を受けて、本気で本音で考えれば、真の学びができます。物理の学びは付け焼刃ではだめなのです。記憶して（覚えて）テストでそれを吐き出す、では勝負にならないのです。学んだことにならない。真実を問う問いには答えられない。間違えるのです。だから、子どもの本音を引きずり出したい、本音を聞きたい、それが私の願いでした。

ガリレオ・ガリレイは、講義の名手だったと言います。なぜかというと、まず、間違った常識を聴衆から引きずり出すのです。そして、それをつぶしていく。「新科学対話」や「天文対話」のシンプリチオ（アリストテレスの哲学に通じた学者）とサグレド（ベネチア市民）とサルヴィ

ヤチ（新しい科学者）の対話にそれが表れています。

この稿を書くに当たり、久しぶりに（きっと四十年ぶりくらい）岩波文庫の新科学対話を紐解いてみました。その、冒頭に「年少の読者に寄す」と題して、訳された方が次のように書かれていました。とっても感動し、これだと思いましたので、ここに掲載します。第一刷は一九三七年（昭和十二年）の発刊です。仮名遣いはそのままにします。

『ガリレイがどんなに豪い科学者であつたか、といふ事に就ては凡ゆる歴史書に記されて居ります。今でも世界中の立派な学者たちが彼を神のごとく崇めて居ります。併しそれだからと言って、彼を近づきがたい人物だとおもったら間違ひです。彼は偉大な教師でもありました。彼は自分自身分かつてゐもしないひねくれた理屈をこね廻すといふやうな事を決していたしませんでした。彼は、人は欺き得ても、自然を欺く事はできないといふ事をよく知つて居りました。誰の目にも疑ひ得ない事実に就ての知識だけが信頼し得るものである事をよく知つて居りました。事実によつて示す事の出来ないやうな知識に対しては批判の眼を向ける必要がありますが、ガリレイはその時代に最も勢力のあつたアリストテレスの学説を立派に批判いたしました。ガリレイは、学者振つて世の人々を愚人扱ひにする人達の敵であり、如何なる見せかけの権威にも恐れず、ひたすらに事実を明らかにしようとする人達の友人でありました。それですから彼の書いた物の中には、多数の人たちにどうにかして真実を伝へようとする真心があふれて居ります。彼がこの書物で分り易い対話の形を選んだのもこの真心の現れの一つであります。この中で彼は、最も親しい友人として凡ての人々に呼びかけて居ります。』

このことは、私にとって科学だけではなく、学校経営や児童養護施設の子育て（社会的養育）を含めて、すべてを貫く信念であります。事実こそ、そして事実から得られる真実を伝えることこそ、みせかけの理屈から逃れて、幸せな世の中を創ることができるのではないでしょうか。ガリレイが学者ぶって世の人々を愚人扱いする人達の敵であったように、私も権威を振り回して事実を見ない人の敵であり、如何なる見せかけの権威も恐れず、ひたすら事実によって示し、事実で考える人の友人でありたいと思います。アリストテレスの学説は、当時の世界中の人々が信じていることでした。ガリレイの言説を誰もが信じませんでした。例えば、ガリレイは世界で初めて望遠鏡で月を見て、月に山がありでこぼこがあることを太陽の光が作る陰から知りました。月が白く輝くのは、月の表面が砂漠のように砂でできていてザラザラであるから（乱反射）と言いました。人は宗教的な信仰からも反発しました。月は天空の尊い存在であるから、鏡のように滑らかで、だから光っているのだと。人は、自分の信じていることを脅かされると、分けもなく強く反発するのです。その反発は恐ろしいほどです。だから、ガリレイは宗教裁判にかけられ「それでも地球は回っている」という有名な言葉を遺したのでした。

今でも、アリストテレスの学説や常識や権威を真実と取り違えることは、人々の心に残っています。現代に生きる人々はガリレイが教えてくれたことを知識として知っていますが、本当はどうかと問われるとアリストテレスの学説や常識が顔を出すのです。地球が回っているのは本当ですか。天が回っているのではないですか。そういわれたらどんな証拠を示すことができるでしょうか。授業ではアリストテレスの学説つまり本音を引きずり出すことをしなければな

りません。そして、それを事実（実験）でつぶすのです。それでやっと「はっきりとわかった」ことになるのです。視点を明確にしてやらないと実験事実さえ誤って判断するのです。「先生はあのように言ったけど、本当はこうさ。テストは点を取らなければならないから先生の言ったように答えるけどね。」これが本音なのです。そのくらい、人間の「常識」は強く硬いのです。それを、自分でやった事実でうち破られるから、頭が回転する。授業が面白くなるのです。

私は、生徒がどのような本音を持っているかを、実験レポートや班ノートから学びました。私自身が生徒の本音を知らなければ、それを言葉にして生徒に問うことができないのです。班ノートは、班の仲間（四人）が読みますから、互いの啓発の場にもなります。

屋代高校の理数科の生徒（二期生）が、最後に書いてくれた文を紹介しましょう。

『最後に先生独自のものとして、班ノートがありました。あれは、他の班の人はどう思っているか分かりませんが、少なくとも僕らの班のメンバー（F、T、Mk、Mt）は一人一人のノートを読み、そして先生の返答を読み、そして友人の考えを吸収して自己を成長させ、またみつめなおすのにとても役立ったと思っていると思います。一年間楽しい授業をありがとうございました。』

このような文を読んで班ノートが対話になり狙った役割を果たしていることがわかります。そして、次への力が湧いてきます。

おっしゃんの修証義解説

㉒ 愛語というは、衆生を見るに先づ慈愛の心を発し、顧愛の言語を施すなり、慈念衆生猶如赤子の懐いを貯えて言語するは愛語なり、徳あるは讃むべし、徳なきは憐むべし、怨敵を降伏し、君子を和睦ならしむること愛語を根本とするなり、面いて愛語を聞くは面を喜ばしめ、心を楽しくす、面わずして愛語を聞くは肝に銘じ魂に銘ず、愛語能く廻天の力あることを学すべきなり。

22・二つには愛語

愛語とは、母がいとし子を愛するように、いつくしみの心をもってすべての人に言葉することであります。人の善行は心よりほめたたえ、人の悪行はあわれめばとていささかもののしってはなりません。人の悪口を言ってもこの世はしあわせにはならないからであります。姑が嫁を、嫁が姑を、資本経営が労働組合を、労働組合が資本経営を、自由主義が共産主義を、共産主義が自由主義を、いつまでののしっていても、家庭の幸福も、会社の繁栄も、世界の平和もあり得ません。近隣のつきあいから国際外交にいたるまで、よし自分にあだする敵さえも心服させ、また立派な方とじっこんになるのも、みな愛語が根本であります。直接に愛語をかけられれば誰しもがほほえみます。バスの車掌さんのやさしい言葉や、お役所の窓口の親切な言葉が、どんなに社会を明るくするでしょう。それにもまして、間接に『お体を大切にとのことでした』とか『くれぐれよろしく申されました』とか愛語をきけば、心にしみて嬉しく懐しく、お互に『御苦労さん』とか『有難う』と交しあう愛語が、人の心を動かし、社会を動かし、やがて天地をも動かす力となるのであります。

敬愛信

円福大黒天初縁日

新型コロナウイルスの感染拡大が第三波となって全国を襲っています。

皆さま、政府や自治体から送られる感染防止のメッセージを受け止めて実践しましょう。円福大黒天初縁日は、昨年に続いて開祭を断念いたしました。それに代わって大祈祷会を内献(寺内行事)で執行いたします。

大黒天のお札をお申し込みの皆さまには、例年のように積善福徳開運厄除の円福大黒天さまに除災招福をお祈りしたお札を、大祈祷の写真と圓福大黒天宣示や縁起物とともにお送りいたします。巻末の振込用紙でお申し込みください。

コロナの中ですが、鳥羽弘幸実行委員長様や西横田の役員の皆さまが協力してくださり、本当にありがたいです。

感謝のお知らせ

○令和二年十一月分（十一月四日～十一月二十七日）

●SABA資金
（宮城県）様
（東京都）様
（埼玉県）様
（神奈川県）様
（長野県）様

（岐阜県）様
●エコ村支援
（大阪府）様
（宮城県）様
（東京都）様
（埼玉県）様
（神奈川県）様
（長野県）様
●おもいやりの会
（岐阜県）様
（神奈川県）様
（長野県）様

●タイスラム奨学生支援
（岐阜県）様
（神奈川県）様
●大黒天祈祷料
（千葉県）様
（埼玉県）様

（神奈川県）様
（長野県）様
（岐阜県）様

ご協力ありがとうございました。

十二月の法母会　お休みです。

正月　参禅会

一月三日　午前六時より

『円福』　令和2年12月号
第四八十三号
定価一五〇円

発行日　令和2年12月10日
発行人　藤本光世
発行所　円福友の会
〒388-8005 長野市篠ノ井横田円福寺
TEL(〇二六)二九二―〇三八一
FAX(〇二六)二九三―九六二九
振替口座
〇〇五二〇―七―一六二五六

円福友の会・ＳＡＢＡスクール

愛の日の丸　ＳＡＢＡ運動

カンボジア小学校校舎建設

カンボジア　エコ村支援

タイ スラム街奨学生支援（教育里親）

大災害被災地支援

シャンティ国際ボランティア会協力

おもいやりの会（愛育園児童自立支援）

太平観音堂護持発展

円福友の会入会のすすめ

上記の **協力金は**　郵便振替 **00520－7－16256**
加入者　**円福友の会**　あてに御送金下さい

〒388-8005　長野市篠ノ井横田 円福寺内
TEL　０２６－２９２－０３８１
FAX　０２６－２９３－９６２９
http://ryu-enpukuji.com/tomonokai/
enpuku2@janis.or.jp